

既婚婦人の衣生活態度と衣服の所持状態

共立女短大 ○杉田洋子

共立女大家政 小林茂雄

目的 服装に対する意識と行動は、単なる消費者の消費意識のみではなく、人間の複雑な生活意識や生活システムとの関連からもとらえる必要があると思われる。本研究は、衣生活を中心とした生活態度に関する意識調査と被服の所持状態に関する調査から、生活態度により衣服の選択及び所持に差があるかどうかを考察することを目的として行った。

方法 各種の調査等から取捨選択した衣食住生活全般に及び生活態度を示す意見190項目について、本学学生の母親194名を対象として昭和57年6月に予備調査を行い、因子分析によって70項目を選定した。又、アウトウエアとしての洋服及び和服の所持品目としては各種実態調査を参考に検討し、洋服41品目、和服23品目、計64品目を選定した。本調査は、昭和57年10月に本学学生の母親171名及び併設幼稚園児の母親100名、計271名を対象として質問紙法による配票留置法によって実施した。(回収数156名、回収率57.6%)

結果 生活態度を示す意見から因子分析により10コの基本因子が抽出された。(累積寄与率は48.4%)この基本因子と被服の所持状態との関係については、例えば次のような特徴がみられた。ファッション自信因子；+反応の強いグループは、-反応の強いグループに比べて洋服、和服とも所持数が多く、イブニングドレス、つむぎ、大島のようなぜい沢品や、トレーナー、ヨットパーカーなどの流行品の所持が多くなっている。見えっぱり因子；+反応の強いグループは、-反応の強いグループに比べて和服の所持数が多く、キユロットスカート、トレーナー、タンクトップのような流行品は所持数が少ない。